

編集室

* ICTの展開が、諸業種でビジネスモデルの変換をもたらしている。この編集室では、学会出版のビジネスモデルを音楽・出版一般の事例と比較して見ていってみよう。

* 音楽業界は、インターネット・携帯電話による音楽配信事業の拡大に伴って変革を迫られてきた。昔の携帯音楽プレーヤーは、カセットテープから始まり、MD、CD、DVD、HDという変遷を経て現在はフラッシュメモリが記憶メディアの主流である。その変遷は、元の楽曲の販売形態に直結している。CDのころまでは、音楽は記録メディアにバンドルされてパッケージとして付加価値を付けて売るモデルが主だった。近年ではインターネット・携帯電話を通しての1曲200円ほどの楽曲単位の販売モデルが主流となっている。このビジネスモデルの変化によって、有名アーティストの場合で1曲ごとの販売は広報と位置付け、ライブ活動で主な収益を上げるといったモデルに移行している例もあるという。一方でアルバムを一つのパッケージのアートと位置付け、楽曲単位での販売はしないアーティストもいる。こういった商法の多様化は昔のLPレコード、CDでアルバム販売していた時代にはなかったことであり、インターネット・携帯電話という情報通信技術の普及があってこその変化である。

* 出版業界でも同様の変化が急激に顕在化している。元々電子書籍という形態は地道に整備されてきていたが、ここにきて電子書籍端末(的)モバイル機器がブレイクして、日本でも有名作家が自分の作品を率先して電子書籍形態で提供するといった話題が世間をにぎわせた。海外の学術出版社は、各分野の教科書・研究書籍の電子書籍パッケージを教育機関向けに販売する等のサービスをしている。新聞にまで目をやると、世界的規模でインターネットの拡大や不況によって広告収入・販売が減少し、廃刊になるものもある。インターネットで得られる情報がただと思っていると、ジャーナリズムの空白が生まれる可能性も指摘されている。一方で新聞Webサイトを有料化する試みも進展している。

* では、本会の会誌・論文誌の編集・出版のビジネスモデルはどうだろうか？ 数年前まで毎月会誌・論文誌が会員に郵送されていたが、今は紙媒体での発行は会誌のみで、音楽配信サービスと同様に、論文誌は電子ジャーナルとして学会サーバからインターネット配信されるようになった。音楽の1曲ごとのばら売りは、電子ジャーナルでいうところの

ペーパービューモデルであり、本会論文誌の場合、英文論文誌ならJST J-Stageで、会誌等を含めた全体は2年以上前のものならNII CiNiiで閲覧可能である。

* 新聞が紙媒体から有料オンライン版へと形態を変えつつあるのと同じように、本会においても既に会員への和英論文誌の配布形態を、冊子体から所属ソサイエティ分のWeb配信へと、変更を行っている。新聞でニュースWeb配信は永遠に無料としているところもある。本会では現時点では著者支払モデルのオープンアクセスに近いエレクトロニクスソサイエティ発のIEICE Electronics Express (ELEX) というレター論文誌と、10月刊行予定の、基礎・境界ソサイエティからのNonlinear Theory and Its Applications, IEICE (NOLTA)があり、ともに冊子体は発行されず、J-Stageで電子ジャーナル形式のみで発行される。

* オープンアクセスというと読者は無料で閲覧できるビジネスモデルと誤解されている向きもあるが、正しくは持続可能な財政負担モデルのもとオープンなアクセスを実現するビジネスモデルである。ELEX, NOLTAと現状では違う和英論文誌は、学会と著者が応分の負担をしつつ購読者も会員としてそしてサイトライセンスも活用して購読するモデルで、著者は掲載された論文を自分のWebページや所属機関の機関リポジトリに引用を付けて(現状では半年の猶予期間の後という条件付で)公開できることになっており、オープンアクセスモデルでいうところのグリーンジャーナルとなっている。学術情報発信の周辺課題で、学会出版として会員サービスを念頭に置いた上で著作権をどう考えるかという課題がある。

* 会誌は、一部海外の会員を除いて月刊誌として郵送され、それを開封することで定期的に会員サービスを確認するモデルとなっている。学会Webページでは毎号目次・巻頭言とともに一つの記事が電子的に無料で公開されている。

* この現状を踏まえて本題はここからどう展開するか、なのだがこれについてはまたの機会を頂いた際に成果的なものまで書けることを目指して、今後この学会の重要な柱の出版編集のビジネスモデルについて真摯に取り組んでいきたいと考える所存である。

(編集理事 今井 浩)